

---

# キンモクセイ

真澄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キンモクセイ

### 【NZコード】

N9775S

### 【作者名】

真澄

### 【あらすじ】

15年前、国王一家が失踪した。あのときから行方不明のままの姫との再会を待ちながら、ジェイは大学生になつていた。姫と幼なじみだったことを誰にも言えないまま 友人にも、好きな人にも。

## 序章

15年前までこの国には王がいた。

人々はまだ、国王一家が不在となつた経緯を語ることができない。15年は、心の整理をつけるにはあまりにも短くて。

けれどあの頃子どもだった自分にとつては「もう15年」だ。

あんなにいつも一緒にいた彼女の顔だつて、今は写真の中のそれしか思い出せない。

私の顔を覚えていて、と言つた彼女。

五歳まで一緒に育つた彼女。

このまま忘れてしまうのだろうか？

今は行方の知れない、

この国の姫だつた彼女のことを。

＝＝＝＝＝＝＝

数日前から宮殿内は様子がおかしかった。まだ五歳だったから何が起きたのかはわからなかつたけれど、その異様な空気は感じ取つていた。

人が、どんどん消えて行く。いつも遊んでくれていた兄さんまで、とつとつ出て行つてしまつた。

今日は外に出るなど言っていたのを、隠れてそつと抜け出す。使用者の宿舎から宮殿に向かい、少し歩くと、

「ジヒー・ジヒー・」

いつもとは違う泣き声で、彼女が息をきかせつて走つてきた。

「……はあ……」れこれ、もつてて

渡されたのは写真。

「わたしの写真をもやしてこむの」

「どうして」

「わたしのかお、変わっちゃう。名前も、変わっちゃう」

「リリーがいなくなっちゃうの？」

「だから、これ、ジーがもつてて」

リリーとジーイが一人で写っている写真。澄まし顔が気に入らないと書いていたのに、咄嗟に持ち出せたのがそれだなんて。

「わたしのかお、ジーはおぼえていてね」

じゅづぶんには理解しきれないままに、ただただうなづく。

「おぼえてる。わすれないよ。かおが変わっちゃってもリリーのことはわかるよ。ちゃんとリリーって呼ぶよ。やべへへ……」

小指を差し出そうとしたとき、姫と呼ぶ大人の声が近づいた。リリーが小声でせかす。

「はやくかくしてー」

「姫、写真を持ち出しませんでしたか？」

「…」めんなさい。これをジューに渡そうとしたの

カモフラージュ用に持ち出したもう一枚の写真を侍女に渡すときは、もう大人に見せる顔になっていた。大人の前では決して泣かないリリー。

だから最後に見た顔は、いつものわがままな彼女ではなく、「姫」の笑顔だった。

指切りは間に合わなかつた。写真を隠していたから、手をふることもできなかつた。

侍女に連れられて彼女が宮殿へ帰つていく。

ただ、キンモクセイの甘い香りだけがその場に残つた。

「元々はさ、國民に慕われた王室だつたんだよ」

15年前までの国には王がいた。

王宮殿は主を失つたあと、建物をそのまま生かして大学の校舎として、各國から学生を受け入れていた。國名から取つたライグヒト大学は、留学生のほうが多いのが特徴で、この国の出身者は学生の一割程度しかいない。

今までタブーに近かつた、ライグヒト王一家の失踪について研究する会（通称「王研」）が、変わり者の集まりとして黙殺されているのも、「自由」という校是だけでなく、その国籍比によるところが大きい。事実、ライグヒト出身者はまるで寄りつかないので。

「けど、まわりの国からしたら王制そのものが異質でね」

「ヒーを片手に説明するのは、この「変わり者集団」を集めた首謀者・ヨウ。一年前、入学してすぐに「ライグヒト王について語り合いたい人募集」と声を上げた、自称・王制マニアだ。

「じゃあ王制廃止は外圧だつたってこと?」

返すのは、ゴリ。この大学に来るまで王のいわくをまったく知らない  
かつたくせに、こうして王研に入り浸っている。それはそれで変わ  
り者だ。ここにいるのは皆、マニアックにライヴヒト王家について  
語るような奴ばかりなのだ。

「外圧つていうと大げさだろ? けだし、発端はやっぱ外からの影響  
だつたらんじやないかな。国民の王室支持率は高かつたようだから、  
国内から不満が出たとは考えにくい」

二人の会話を聞くとはなしに聞いていて。

「支持率つて、情報操作されてたりとかじゃなくて?」

ゴリのその言葉に、つい反論したくなる。いや、余計なことまで言つ  
まい。けど。

「それはなさそつだな。國民からは本当に慕われていたみたいだし。  
まあもつとも」  
「愛されてたよ」

つい、言ってしまった。

「ジロー」

ヨウが「うりをふり返るのを視界の端に捉えながら、ジョイはコリに向けて言葉を継ぐ。

「國民はみんな、王を愛していったよ」

「…今も?」

ヨウの言葉には答えず、曖昧な笑みを浮かべただけで、ジョイは部屋を出ていった。

その背中と、それを見送るヨウの泣きそうな顔を見て、こゝえきれないといった様子でヨウが吹き出す。

「ほんつとお前は懲りないなあ

「…またやつちやつた…」

「やあ、さつき俺が言いかけたことや。ライグヒトの人たちは王について決して自分の意見を言わない。ジョイもそうだろ」

そう。ライグヒト人のくせに「タブー」の王研に入つておきながら、何も語らない。一般論や客観的な事実は提供しても、自らの感想は決して述べない。一番の変わり者、それがジョイなのだ。

「まあ何かあるんだね。俺たちにはわからない、この国の人気が負っている何かがさ」

だからあんまりジョイを困らせてやるなよ。コウはやうひ言って、冷めかけたコーヒーを口に運ぶ。

でも、と、コリは思う。その「何か」を知ることができたら、ジョイをジョイの負っているものから解放してあげられるような気がして。ときどきあんな風に、ジョイの嫌がることを聞いてはそのテリトリーに踏み込んでしまうのだ。

「ジョイは王の何が知りたくてここに来るのかしら」

「あいつが固執してんのは姫のほうだと思ひぜ」

パソコンから顔を上げ、そう口をはさんだのは、王研の4人目・口づだ。失踪マニア　なぜ失踪したか、ではなく「どうやって」失踪したかを明かしたい、というコリからすればいちばん得体が知れない男。

「姫？　リリー姫、だっけ」

「そ。本人が何か言つたわけじゃないけどさ、あいつ行方不明の姫をなんとかして見つけてあげたいと思ってんじゃないのかな。俺の

失踪方法論も真面目に聞いてくれるし

「…ふーん」

なんとなく面白くない顔になる。

「ジョンソン教授の研究室にいるのもそのためだろ」

「？」

ジョイは薬学部の学生だ。それと何の関係があるのでひつゝ。聞こ  
うとしたコリをヨウガ小突く。

「なに、お姫さまに嫉妬してんの?」

「…しないよ!」

「まああれだな、ジョイが王研にいる目的なんぞ、王の消息よりも  
深い謎だつてことや」

だね、と苦笑を返し、ヨリも講義に向かひべへ席を立つた。

＝＝＝＝＝

王研のたまり場を出たジェイは、そのまま学生寮へ足を向けていた。学生寮は大学本館から歩いて10分程のところにある。その建物はかつて、王宮殿に住み込みで勤めていた使用人の宿舎だったものだ。

この国の人は、王について何も語らない　　そう言われるけれど。  
語らないのではない。語れないのだ。

ライグヒトは元々大きな戦乱も内紛も経験したことのない国だった。国民も、本能的に争いを避ける傾向にある。それが15年前の民主化のときは、推進派と王制擁護派とでかなりギスギスしたという。

ぶつかり合つことを知らない民は表立つて言い争つことをせず、水面下で疑い合い、互いに不信感を募らせていった。

武力こそ使われなかつたものの、誰が敵か味方かわからない。神経をすり減らす日々が疑心暗鬼を生んでいく。

あんな思いをもうくり返したくない　　と、人々は暗黙のうちに、王の失踪について口を開さずようになつた。それを何者かの力が働いた「事件」と呼ぶか、自らの意志による「逃亡」と呼ぶか。それすら口にすることができずに来たのだ。

そうして大人が口を閉ざせば、子どもたちには知る由がない。知らないことは、感想を求められても答えられない。だからライグヒトの人々は、王について聞かれても柔軟な笑みでかわすしかできないのだ。

自分でって、ヨウから教えられて初めて知ることが多いのだ。自分の国の中の「こと」。

ましてやあのとき　自分はあのとき、あの場にいたのに。

本館から寮へ向かう道の途中、甘い匂いが鼻を突いて、ジョイはそちらの脇道にそれた。

この花が香る季節が今年も来た。

オレンジ色の小さな花。庭師だった父。厨房係だった母。散った花びらを掃いて集めるのは自分の役目だった。

今暮らしている学生寮に五歳まで住んでいたことは、誰にも話せていない。この国では、王室との関わりは隠すものだったから。

ヨウたちには明かしてもよいはずなのに、自分の気持ちがうまく整理できていなくて。

「ライグヒト人だから王のことを語れない」以上の何かを隠していることを、ヨウたちは気づきながらも放つておいてくれている。それに甘えて、自分と王室との関わりを言えずにするままだ。だから時々ヨリが、さつきみたいに深く斬り込んでくると、戸惑ってしまう。知つてほしくもあり、知られたくなくもあり。

今まで誰にも触らせずにきた、そしてまた周囲の誰も触つてこよつとしなかつた部分に、ためらいがちに手を伸ばそうとしてくるココ。その手をときどき握んでしまいたくなる。

…ああ。キンモクセイが香る。

キンモクセイの甘い香りをかぐと、彼女の声がよみがえる。

ジロー、と、語尾を伸ばした発音で自分を呼ぶ声。

国王夫妻の一人娘として愛され、宮殿の太陽だった姫。少しづがままで、勉強を抜け出しては、いつもジロー、ジロー、ヒジャマしに来た。最後に彼女と会ったのもこの場所だった。

「リリー…」

今どこにいる? 何を見て、何を感じている?

きみに会つたことがあるんだよ。

「ジヒー・ジヒー…」

またか、とジョイはこわいからうんざつした顔で、一いちらへ駆けてくるリリーを見やつた。

「ジヒー！なにしているの？..」

満面の笑みを浮かべ、息を切らせてまとわりついてくる。まだ五歳ではあつたけれど、将来の王位継承者として、ほかの子どもよりも厳しい教育を受けていたリリー。だけれどリリーはいつも、家庭教師の目を盗んではジョイのところへ走ってきた。宮殿内にほかに子どもがいなかつたこともあつて、いつもまとわりついてきたのを覚えている。そしてそれは、いつもジョイを困らせていた。

リリーに言われるがままに匿えれば教師に怒られる。リリーを無視すれば、優しくしてさしあげなさいと親に叱られる。リリーのわがままのせいでジョイはいつも理不尽な思いをしていたのだ。

「またメグ先生の授業を抜け出してきたのかよ」

「…ちがつもん！ 今日はおかあさまと一緒にだもん」

見ると、少し遅れて王妃が歩いて来ていた。公務で不在がちの王妃に会えるのはめずらしい。

「あー、リリーはいつもお勉強を抜け出してくるの？」

王妃に笑いながら問われ、そうだとも違つとも言えないリリーはジェイを恨めしく見やると、

「おにこさん！お花をおしえてーー！」

と、その後ろで剪定作業の手伝いをしていた青年のほうへ走っていった。

リリーのやつ、また兄さんに甘えて…。姫様、と優しく微笑み、王妃に礼をとるのは、庭師見習いのフレッドだ。去年、高校を卒業してすぐジェイの父親のもとへ弟子入りをしてきたときは、兄ができるようだとジェイもリリーも大喜びした。ジェイとリリーにとって、お互い以外でいちばん年が近いのが彼だったのだ。

だからついでリリーはいつも、大人に叱られたときはフレッド兄さんの胸に逃げ込むんだ。自分もまたフレッドに甘えて「ふー」とは棚に上げ、兄を取られたような気持ちでリリーを見やる。

「ジェイ」

王妃に呼ばれて、ジェイはリリーから視線を外し、向き直った。

「こつもリリーと仲良くしてくれてありがとうね」

リリーと同じ年のジェイを、国王夫妻はかわいがってくれていた。公務で留守にすることが多く、とくに王様にはあまり会つたことがなかつたけれど、王妃様はいつもして時々顔をなめてくれた。優しい王妃様のことは好きだった。

ジェイ、と優しく呼びかける声は、もう思い出せないけれど。

＝＝＝＝＝＝＝

翌日。

学生寮の部屋を出ると、ユリと鉢合せた。ジェイが入学して半年後に ユリの国では春に高校を卒業するためだ 、隣りの部屋に入ってきたのがユリなのだ。

「あ…」

決まり悪げに昨日の発言を謝りつつするのを遮るように、ジェイはぽん、とユリの頭に手をおいた。気にすんな、といつよじ。何も言えない自分が悪いのだから。

しかしジェイにとつては贖罪の意味を込めていたそれだが、ユリにとっては「拒絶」だった。

また、だ。ジェイは怒つてさえくれない。

この国に来てからユリが気づいたことは、ライグヒト人は常に柔軟な笑みを浮かべているということ。それはつまり、他人に感情を見せないためだ。

…遠いなあ。ジェイが、遠い。

そんなさみしさを隠し、当たり障りのない会話を交わしながら大学の近くまでやつてくると、ユリの携帯電話が震えた。メールの内容を確認する。

「…あ、わたし1限休講だつて」

「残念。あと30分早くわかつてたら寝てられたのにな」

「おひ、ちょうどいいとこにいた！　一人とも時間ある？」

見てほしいもんがあるんだ、とロブが小走りで寄ってきた。

「わたしは今できたと」。ジョイは授業だよ

時間が空いたら必ずたまり場に行く、とジョイに約束をさせ、ユリを連れていったロブが、たまり場でパソコンの画面に映して見せたのは、女性の写真だった。見たことがあるような、ないような。なんとなく不自然な。

「これ、合成？」

「そ。リリー姫の現在の想像図」

「うふふ」とヨリが聞く。

「リリーの写真は公には一枚も残つてないだろ？　だから国王夫妻の写真を取り込んで合成して、ハタチくらいにしてみたんだ」

「足して2で割るつてやつ……？」

いや、とロブが続ける。

「王妃に似た金髪、つづく新聞記事があるから王妃似と想定して、7対3で王妃の要素を多めにした」

「ふーん…でもそんなの作ってどうするの?」

「JALの会誌に載せんだよ」

そういうえば、秋には一周年記念誌を作るのだと以前ヨウが言っていた。

そして、お、できたのか、ヒヨウがやって来た。

…ほんとにこの人たちは。いつ来てもこの部屋にいるナビ、授業出てんのかしら。ヨウはソシなくこなしそうだけど、ロブは四年じや卒業できなさそうだな。

そんなことをユリが思っている間に、先ほどと同じ説明を受けたヨウは、あっさりと言った。

「ヨリ一は国王似だよ」

え、マジでー?とロブが声を上げる。

「髪の色は確かに王妃と同じだけど、顔立ちは国王によく似ているつて、何歳だかの誕生日の記事に書いてなかつたかな」

抜かつた、やり直しだ、とパソコンに向かうロブに呆れていると、ヨウは驚くことを言った。

「ゴリは監修やつてね」

会話の、と、やいつと書い。

「えつ！？ なんでわたしが？ なんにも知らないのに」

だからだよ、とヨウはコーヒーを淹れながら説明する。

「マニアが集まって作るどびうしても独りよがりになるからね。ちゃんと一般の人にも読んでもらえるものにしたいわけ」

だからヨリがチェックしてよ、とこのヨウの言ふのはわからぬくもない。

「…じゃあさく一般人の感想を言わせてもらひなご。それはちよつと大丈夫かなって思つ」

と、ゴリはパソコンの画面をちょいちょいと指差す。

「だつてさ、もしかしたら本人が目にするかもしれない可能性はゼロではないでしょ？ 身を隠してるわけだから、自分の顔が勝手に載るのはいい気持ちしないんじやないかなあ」

そんな可能性なんて考えもしなかつた、とロブがううむと唸り、ヨウは、やはりヨリを勧誘してよかつたと、ニヤリと笑う。

「失踪当時の五歳のときの顔ならまだいいかもしないけど」

「なるほどね。それなら、こんな小さい子が関係てるんだってことで関心をひくかもしない。どうだ？ ロブ。こないだ作ってた

る

「じゃあ発表用にはあっちの五歳の想像図のほうですか」

現在の図も作ることは作るんだ。やっぱりロブの興味ってわからな  
い。ますます呆れるヨリに、でもな、とロブが語り出した。

「たぶん、今のコーヒーはこの顔じゃない」

「……どうこう」と。

「国王一家はおそらく姿形を変えている。人相も色素も」

「どうやつて」

「そういう薬があつてな。もちろん認可されてないし闇のものだけ  
ど、状況からみてそれで身を隠したんだね? るのがいま主流の説」

……」わい。それが正直な感想だつた。やっぱり興味本位で関わつ  
てはいけないんじゃないの? 好奇心でも興味本位でも、忘れら  
れるよりいいから、とジェイは言つてたけれど

もともとヨリは、ライグヒト王には関心がなかつた。この国に王が  
いたことすら知らなかつたほどだ。ただ、たまたま研究室の前を通  
りかかつたときに、寮の隣りの住人・ジェイを見つけて声をかけ  
そのユリにヨウが声をかけて、ここに通つようになつたのだ。

はじめ戸惑つた。ライグヒトの人にとっては大切な存在のはず。

何も知らない自分が興味本位で話を聞くのは失礼じゃないか。そう躊躇するコリに、ジョイはぼそりとつぶやいたのだ。忘れられるよりいいから と。

「薬学部のジョンソン教授がその薬の解毒剤の研究をしてるんだ」

「あ…たしかジョイがいる研究室の…？」

「そう。もと王家の主治医でね、宮殿にいた過去を公表している数少ない1人だよ」

「じゃあコリ、これ読んどいて」

『ウ』に手渡された紙の束は、ジョイの書きかけの原稿だった。

この国には15年前まで王がいた。

国民は王室を慕つており、若い国王夫妻と一人娘の一家は国民に愛されていた。

しかし、近隣諸国の田には非常に時代遅れの体制と映つた。なにせいちばん遅かった国でさえ、50年以上も前に民主化を果たしているのだ。

国外の知識人の影響を受けて、若い層を中心に少しづつ民主化への気運は高まつていつたが、小さいながら歴史の長い国のこと。王制を守ろうとする保守派もまた、一步も退かなかつた。

少しづつ、少しづつ、人びとのあいだの空気が悪くなつていき、いよいよぶつかり合つかと思われたこと。

突然、国王一家が姿を消した。

はじめは互いの関与を疑つていたが、王宮殿の使用人がひとり残らず、十分な手当でとともに暇を出されていたことがわかり、国王自身の意志によつて姿を隠したのだとわかつた。

民主化推進派は攻撃対象を失い、王制擁護派は御輿を失つた混乱のなか、もともと争いを好まない民は手を結び、新しい政府を起こしたのである。

王の失踪には何か意図があつたのだと信じる者もいる。疲れ果てて逃げ出したのだと思つてゐる者もいる。

真実はわからないが、一滴の血も流さずに民主化を実現できたのは、王の失踪に寄与するものだと言えるのではないか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「…ジョイは王さまの味方なんだね」

ヨウが顔をあげ、問いつような視線をユリに向かへた。

「これ読むとそんな気がする」

ユウの視線がユリの頭上を通り越すと、背後からぼそりと聞こえてきたのは。

「やつこつふうに育てられてたんだよ、15年前までは

ジョイだった。

「王さまは敬愛すべき存在だつて刷り込まれたんだ。そんなに簡単に憎めない」

でも、トカバンをあらす動作をはさみ

「許せるかどうかはわからない」

そう言って、ロブのパソコンを覗きにいく。

ジェイがそんなふうに王のことを話すのは初めてで、びっくりして聞き流しそうになつた。このあとジェイの発言を。

「その写真、どうで……」

画面上にいたのは五歳位の少女。先ほど話していた「失踪当時のリリー姫」だ。ヨウの指摘を受けて合成し直しながら、先ほどと同じような説明をロブがする。その隙に、ジェイはスッといつものポーカーフェイスを取り戻していた。

しかし寸前に見せた明らかな動搖。瞳は揺れていて。そして何かがユリの頭に引っかかった。

なんだろ? 何かおかしかつた。

その写真、どうで……?

その写真、どうで手に入れた?

ハツとする。

それは、“その写真”が何かを知っている人の発言だ。

「さつも回じりとこ氣づいたりじご。田を眇めてこる。

ジョイはリリーの顔を知っている？しかし公式の写真は残っていない。ならば直接見た？いや、五歳で一度見たきりの顔が記憶に残るものか。ならば 何かもつと深いつながり？たとえば非公式の写真が手に入るような。15年も顔を覚えていられるような。

そこに考えが至り、訊いてみてもよいものかどうか、ココとコウが田配せをしてこるのでしつこい、ロブが無邪気に聞いた。

「ジョイはリリーに会つたことあるの？」

「…凍りついた。ジョイは表情を崩さずこゝ、どうして？と返す。

「未成年だったから公式行事には出てなかつたつていうし、だから写真も残つてないけどさ。誕生日の参賀には姿を見せたらしいじゃん。首都に住んでたんならそういうの親に連れてかれなかつた？」

「…よかつた。他意はない。そもそもロブの腹に、見えている以上の感情など隠れていない。ジョイも警戒をとく。

「…あつたとしても五歳じや顔なんて覚えてないよ」

そこにあつと嘘はないのだわつけれど。

その言葉はコリが知りたかったことの答えにはなっていなくて。

そして、

けれど先ほどの推測を確信に変えたのだった。

＝＝＝＝＝＝＝

「ジH—ジH—」

いつもとは違つ泣きそうな声で、息をきらじり走つてへる。

「…はあ…」れ…これ、もつてて

渡されたのは写真。

富殿は数日前から何かがおかしかつた。気づかれない程度にひとりずつ使用人が去つていき、昨日はとうとうフレッドが「故郷に帰る」と言つて出て行つた。

「わたしの写真をもやしてこむの」

「じうじう」

「わたしのかお、変えひつひの。お前も、変えひつひの」

「コーヒーがこなくなつたひのへ。」

「だかひ、じれ、ジニーがもつてて」

澄まし顔が氣に入らないと書っていたのに、元々持っていたのが  
それだなんて。

「わたしのかお、ジニーがおもえてこひね」

「おもえてる。わすれないよ。かおが変わつちつてもこのーの  
とわかるよ。ちやんとこにリーフて浮ぶよ。みへく…」

「姫、と呼ぶ声が近づき、あわててせかす。  
「まやくかくじてー。」

「姫、写真を持ち出しませんでしたか？」

「…『めんなさい。これをジョーに渡そうとしたの」

カモフラージュ用に持ち出したもう一枚の写真を侍女に渡すときには、もう大人に見せる顔になっていた。大人の前では決して泣かないリリー。だから最後に見た顔は、いつもわがままな彼女ではなく、「姫」の笑顔だった。

指切りは間に合わなかつた。写真を隠していたから、手をふることもできなかつた。

両親と宮殿を出たのは翌日のこと。そのときにはすでに国王一家が姿を消していたというのを知つたのは、大きくなつてからだつた。

=====

引き出しの奥から本を取り出し、そこに挟んであつた写真を手に取る。

色褪せ始めた写真。これを見るのは久しぶりだ。はじめの頃は、親の目を盗んでは何度も手に取り、彼女の顔を記憶に焼き付けようとしていた。しかしつからか、写真のこの澄まし顔しか思い出せなくなつていた。

だから先ほど、ロブが合成したリリーの笑顔を見たとき 予想もしないほどに記憶が押し寄せて、脳裏に甦る彼女のいろいろな表情

「ひいたえてしまつたのだつた。

どんな顔になつてしまつても、リリーに気づいてみせぬ。そんな約束を守るために、教授の解毒剤の研究と一緒にやらせてくれと手を挙げたのだ。

けれども、彼女を探したらよいかわからぬ。もう一度会えるなんて、自分は本当に思つてゐるのだろうか。

「ジョイ！ いるー？」

パタンと本をとじて振り返ると、左手の人差し指をおさえながら、ユリが部屋の入り口に立つていた。

「ね、絆創膏ある？ 包丁でやつつけたの」

苦笑して薬箱を取り出す。指を切つた、腹が痛い、と言つては、ヨリはいつもの部屋へ戻る。

「つひを保健室だと思つてるだろ」

「保健室行くよつ近くで確実ー。」

絆創膏を手渡そうとして、ジョイは顔をしかめた。ずいぶん血が出ている。

「手、貸して」

傷口を洗い、座らせて絆創膏を巻いてやる。そのまま手をつかんで、少し高い位置で支えた。

「血止めるまでこまへりへりへりな」

「…ありがとひ」

もじもじと視線を逸らし、コリが話題を探しているのがわかる。

「やつぱあれだね、遠くの保健室より隣りのジョイだね」

「俺、医学部じゃなくて薬学部なんだだけだ」

「…薬剤師といえば、わざ口づに聞いたんださぞ」

うん? と顔を見るが、コリのまつはまだ目を伏せたままだ。ストレートの黒髪から見え隠れするまぶたに、ああコリはまつ毛も黒いんだなあなどと意味のないことをぼんやりと考へる。

「ジョイがその…研究してるので…」

「ああ、解毒剤?」

そこで初めてコリが顔を上げた。至近距離で視線が交わる。

「それってやつぱり、リリー姫を助けるため…?」

問われて、今度はジョイのまつが目を逸らす。

「…正直わからない。どうしたいのか、自分でも」

でも、と続ける。

「もし薬ができたとして、姫に使いこなさないよ

「どうして？」

「薬が薬だからね。本人の承諾なしに使つてはいけないというのが教授の考え方なんだけど。本人はその薬が自分に使われていることをきつと知らないだろうから」

たしかに。当時五歳の子どもでは、自分の身に起きたことを知るには限界があるだろう。

「そう…」

二人の間に沈黙が降りて、ユリがまた、目を伏せた。

……ユリが視線を泳がせる理由は知っている。手が少し汗ばんでいる理由も、沈黙を恐れて必死に話題を探している理由も。わかつているんだよ、ユリ。

自分がもう少し軽はずみだつたら。あるいは自分がもう少し傲慢だつたら。

とうにユリはこの腕の中にいただらうに。自分で整理がついていないから、宮殿で育つた過去を明かせずにいる。口にできない秘密を持ちながらユリの手をとることはできなくて。ユリの気持ちに自分の気持ちにも、目を伏せたままでいるのだ。

＝＝＝＝＝＝＝

ジョイがじゅらを見ている。こんなに近くで。

会話が途切れれば、コリはもう顔を上げることができない。ジョイの眼差しも、つかまれた腕も、体温を上げていく。

「もう、大丈夫だから」

やつてコリは腕をほじいた。

「ね、作ってるのポテトサラダなんだけど、できたら持つてこようか？」

これのお礼、と、絆創膏を見せてやつ。

「へえ。子どものころ好きだったな。久しぶりに食べたいけど

時計をちらりと見て、

「18時に教授のところに行く約束なんだよ」

「やつか…じゃ、一人分冷蔵庫に入れといつか？」

「ほんと？ それはありがたいな。絆創膏一枚でおかずが一品増え  
るならいつでも歓迎だよ」

「じゃ遠慮なく。お宅の薬箱、頼りにします

ふふ、と笑いあい、大学へ向かうジェイを見送つてコリは自分の部屋へ戻つた。いつもの空気に戻せたことに安堵しながら。

「…ではレポートにまとめて来週お見せします」

「うん。資料は取り寄せておくから」

「よろしくお願ひします」

ジョンソン教授の研究室で論文の途中経過を報告し終え、資料類を片づけ始めたジェイの手元に、教授が雑誌のページを開いて置いた。

「何です？」

「那人、知ってるか？」

話題の人、というタイトルで取り上げられているのは、ガーデンデザイナーの肩書きを持つアルフレッド・R氏。ライグヒト出身だが19歳で留学をし、そのまま海外で頭角を表して数々の賞を受賞したのち、15年ぶりに凱旋帰国をしている最中だという。

「…」

「覚えていないのも無理はないか」

「？」

「富殿にいたころ、見かけたことがある。庭師に弟子入りした若いのが確かにこんな顔だった」

「……。」

「君たちはよく遊んでもらっていただろう？」

「…フレッド兄さん…」

かすかな記憶と面影を重ねてみるが、心もとない。しかしその存在はよく覚えている。父のもとで庭師の修行をしていた。ジョイモリリーも、いつもまとわりついて遊んでもらっていた。

「懐かしい…」

宮殿にいた者同士は暗黙の了解で連絡を取り合いつことを控えていたから、フレッドの消息もあれ以来不明だつた。今でも植物に関わる仕事をしているとは、父が喜ぶだらう。

「芸術学部のやつらが講演に招いたらしくてね。うちの大学に来るんだそうだ」

そこでじつたん言葉を切り、ジョイの反応を確かめるように謙べ。

「君んといのヨウから常々頼まれているんだよ。王家のことを知る人がいたら紹介してほしいとね。彼に連絡してみようかと思つんだが」

「どう思つ? そう呴ねられて、即答ができなかつた。会いたいけれど、でも。

「君は宮殿にいたことをまだ明かしていないんだろ? 昔を知る

人が現れるのは具合が悪いだろ？

「あ……え……は……けど……」

混乱するジヒイの肩を、教授が優しくほん、と呴く。

「君の「」も含めて伝えてみるよ。複雑だろ？ が会いたいのは確かだろ？」

「は……あっがとうござります」

＝＝＝＝＝＝＝

：頭が痛い。

ポテトサラダを約束通りジヒイの部屋の冷蔵庫にしまい、メモを置いて部屋を出ようとしたら「」で、ズキリと痛む頭にコリは顔をしかめた。

勝手知ったる洗面所の棚から頭痛薬をもひつ。

わっそく、お言葉に甘えて　ね。

薬をもらつたこともメモに書き足さう。何か書くものはないかしら。

ジヒイの机を見渡したコリは、一冊の本を見つけた。

「」れ……」

もつ絶版になつていい童話集。児童文学を専攻するコリが研究の資料に使おうと、方々の図書館に在庫を問い合わせていたものだつた。

まさかジョイが持つてたなんて。

ぱらぱらとページをめくる。いけない、夢中になつて読み進めてしまつそうだ。さすがにメモだけで勝手に借りていくのは悪いよねえ……。ジョイが帰つてきたらソシロー借りよう。

逸る気持ちで改めて本を眺める。凝つた装丁。いちばん後ろのページをめくつ、初版本であることを確かめる。

と、裏表紙の布がめくれてこるのに気づいた。

わ、ちゃんと修復しないと。

はがれたところをひとつめくつてみる。だいじょうぶ、破れているわけではなさそうだ。そこに何かが挟まつてしまふことに気がつきなぜだらひ、手にとつてしまつた。

……[写真]?

見たことのある幼い女の子。

カツと熱が上がつた気がした。

この顔を見たのはロブのパソコンの画面で、だ。

「リリー姫……」

「くふ、くふ、と脈打つ音が聞こえる。

わからない…頭痛い…。

なぜジェイガリリーの写真を持っているの？ やっぱりジェイはリーリーとながらりがあつた？ 隣りに立つ小さな男の子は、じやあこれはジェイ？ 「写真の子どもたちの背後に建つのは、

「…」

この学生寮。かつては王宮殿の使用人の宿舎だったところの建物。

その前で澄ました顔をしている2人の子ども。

やっぱりジョイは、リリーと知り合いだつたんだ。あんなにこだわつているのもただの愛国心なんかじゃなくて、二人にはもっと深いつながりがあつて。

「頭痛い…」

湧き上がる苛立ちは、嫉妬？ 姫に？

混乱し立ち廻くすコリの後ろで、カチャリと部屋のドアが開いた。

教授に聞かされた話に軽い興奮を抑えられぬまま、ジョイは寮へ戻つた。

部屋へ入ると、コリがいる。そつだ、夕飯のおすそ分けをくれると言つていた。

「来てくれたんだ。サンキュー」

返事をしないコリに向をやると、手に持つて居る本にギクリとする。

「その本、持つてく?」

不自然にならぬよう氣をつけながら、コリの手から本を取り上げ、隠した写真を取り出そうとした。が。

それはすでにコリの手にあつた。

「コリ、その写真」

「リリーだったんだね。ジョイを苦しめてたのは」

「コリ…?」

「どういう関係だったのかはわからんけど、なんか深いつながりがあつて、だからリリーは今でもこんなふうにジョイをしづらつけている」

「…やめよう」

「ジョイを苦しめたるんだ」

「やめやつし」

「フリーなんて、もう少しにこないの?」

「コリ」

「わたしフリーが嫌い」

「やめやー」

ハツと我に返る。

初めて聞くジローの大きな声に、驚いたのはコリだけではなかった。ジローもまた、自分の怒声に呆然としていた。

視線を落としたままコリが早口に言葉を継ぐ。

「本、借りてく」

「ん」

「サラダ、冷蔵庫」

「ん」

「頭痛薬もうつた

「ん」

「……」めぐ

「……」

バタンと部屋を出て行くのを背中で聞きながら、ジョイは自分の動搖の理由に必死に気づかぬフリをしていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日。

ヨウからの招集メールを受けてたまり場に向かつたジョイを、ジョンソン教授が出迎えた。

「アルフレッド氏が快くOKしてくれたぞ」

「――」

「アルフレッド氏は宮殿で庭師の見習いをされてたそうだ」

ヨウが興奮気味に語る。冷静沈着なヨウにしては珍しい。

「オレが作ったリリーの想像図、本人に似てるかどうか見てもらおう」

教授は覚えてないついでいうし、とロブがちらりと教授を見る。

「15年前の子どもの顔なんぞ覚えていないよ。じゃあ、時間や場

所の打ち合わせはコウから直接してくれ

教授を見送り、ようやく興奮の覚めたコウが、ふと呟いていたよつて言つ。

「やういえばユリが来ないな。いつもこの時間は講義なかつたと思つたけど……具合でも悪いのかな。なんか聞いてない？」

「ああ、やういえば……」

昨夜の去り際に頭痛薬をもらつた、と言つていたのを思い出す。昨日は動搖して聞き流してしまつたが、だいぶ悪いのだらうか。

「部屋にいたら」と広えといつて

「やうだな。声かけてみるよ」

昨夜は少し体温が高かつたかもしれない。熱を出して寝込んでいる姿を想像し、ジョイはスポーツドリンクを買って寮に向かつた。昨夜の気ままずやはひとまず置いて。

ユリの部屋の前でしばし逡巡していると、ユリのクラスメイトが通りかかってくれた。事情を話し、部屋をのぞいてもらつた。

ユリの部屋の前でしばし逡巡していると、ユリのクラスメイトが通りかかってくれた。事情を話し、部屋をのぞいてもらつた。

「出かけてるみたいよ」

部屋の中を見せてもらひと、確かにユリは不在で けど 何もかもやりかけて慌てて飛び出したような散らかり具合に違和感を覚える。

「携帯も置きっぱなしだし、どこか近所ですぐ戻るんじゃない?」

「ならいいんだけど…」

礼を言つて部屋に戻る。考えすぎかもしれない。単なる頭痛は薬を飲んでおさまったのだろう。

……ついに頭痛薬なんてあつたか?

まさか。

飛びつくように薬箱を開ける。茶色いビンに入れたのは、教授の指導を受けて試作した解毒剤だ。3錠減っている。これを飲んだのか?

落ち着け。

これはあの薬の効果を打ち消す解毒剤だ。薬を服用していない人は何の影響もないはず。大丈夫だ。きっと。

震える手を抑えながら、ジョイは教授に電話をかけた。

「… 確かなのか？」

ジェイの報告を受け、教授が発した言葉はそれだった。

「本人が不在なので確証はないんですが、状況から見て薬を飲んだ可能性が高いんです……先生、あれは関係ない人が飲んだ場合には副作用はないはずでしたよね？」

「ああ大きなことは起きないが……まずは本人を探して、薬を飲んだのかどうか、飲んだとしたら何時くらいのことか、確認しなさい」

「はい」

「その学生は何学部だ？ 僕から家族に連絡をとる」

「家族…ですか！？ 重篤なことにはならないのでは…」

ジェイ、と厳しい声が聞こえ、電話を握り直す。

「今何の話をしている? 解毒剤を関係ない人が飲んだ場合、の話だろう。その学生が過去にあの薬を服用したことがないかどうか、確かめる必要がある」

「まさか」

「だつてあの薬は闇のもので。

「服用していないことを確認したのか?」

「いいえ…」

「どちらにしても、まずは本人を探せ。見つけたら安静にさせなさい。大きな副作用がなくても微熱くらいは出るかもしね。それと」

「はい」

「薬剤の保管に関しては報告書を提出するなり。すべて済んでからでいい」

「…はい」

電話を切り、外へ出た。財布も携帯も置きっぱなしとこりとから、学外へは出でていないうつと見当をつけた。事情を話してヨウやロブにも探してもらえ、と脳が指令するが、教授の言葉がジョイにブレークをかけていた。

そして寮の付近から徐々に範囲を広げていき、キンモクセイの木立にさしかかったとき。木の根元の辺に座り込む女性の半身が目に入った。

「ユリー！」

駆け寄つて確かめる。しかし、身を起こして振り返つたその女性は豊かな金髪。

「あ、すみません」

人違いを謝り、来た道へ引き返した。引き返そつとした。

「ジョー…？」

去りかけてピタリ、と動きを止める。

語尾を伸ばした発音。そんな呼び方をするのは一人しか知らない。ゆつくりとふりむく。またか。けじまさか。

「ジユーー！」

「……リリー？」

「覚えていてくれた？」

「本当に、リリー、なの……？ ビウヒト……」

あまりに突然のことに自分の目が信じられなくて、目の前の女性をまじまじと見つめる。そして、ジユイはあることに気が付いた。

その服、ユリが着ているのを見たことがある……！

「…ユリ。ユリだろ？ ユリがリリーだったのか！？ ジヤあやつ

ぱり解毒剤が効いて…どうして今まで黙っていた？ 僕のことわかつたのか？」

矢継ぎ早に問い合わせるジョイを、低い声が遮った。

「ジョー、私のこと、『リリー』であることを思い出したユリ”だと思つてゐる?」

「え？」

「違うわ。私はユリじゃない。“ユリって名乗らされてたことに気が付いたリリー”よ」

「なに…言つてんだ？」

「ユリなんて人、最初からいないの。私は、私をもつユリには返さないから」

頭が状況に追いつかない。呆然とするジョイの手の中で、携帯電話が鳴つた。

「ジョイ、ユリは見つかったか」

「先生……今、」

目的語をなんとすればよいかわからない。

「そうか。ジョイ、彼女の両親と連絡がついた。彼女はあの薬を服用していたよ。15年前に……ジョイ、彼女の両親は」

そうだ。ユリがリリーだったのなら、彼女の両親は元国王夫妻。おそらく教授もそれを知ったのだろう。声が少し、上擦っている。そしてそれは、目の前の出来事が現実であることをジョイに示していった。

教授からいくつかの指示を受け、電話を切ると、ユリ、いやリリーを見やる。

「教授が　ジョンソン先生だよ。覚えてる？　先生が、歩けるようなら診察するから連れてこいつて」

「……行くわ。先生にも私を見ていただきたいし」

ああ、その日はたしかに、負けず嫌いなあの子のものだ。

少し迷い、歩き始めた彼女にユリではなくリリーと呼びかける。

「教えてくれ　何があつた」

＝＝＝＝＝

昨日はもともと頭が痛くて、ジエイのところでもらった薬を飲んでそのまま寝てしまった。夜中に熱が出て、暑くて、それでも昼過ぎまで眠り続けて。ノドがかわいたなって水を飲もうとして、顔にかかる髪に違和感を覚えて。

鏡を見たら、昨日までとは違う顔があつた。

あれ、私金髪だったつけ。この顔、昨日ロブのパソコンにあったのと少しだけ似てる。

少し頭がぼうっとしていた。それが徐々に晴れてくる。

違  
う。

違  
う、違  
う！

これが私だ。私はこうちだつた。今までが違つてたんだ。どうして?  
? なんで私は黒髪だったの? なんで、私はコリと名乗つていた  
の?

5歳までのかすかな記憶。私はたしかにリリーと呼ばれていた。そ  
して昨日までの、コリとしての記憶。たゞひとつもたゞつても6歳ま  
でしか思い出せない。その間をつなぐのは。

そうだ。ジョイの書いた原稿。会誌の。ペタリとペースがはまつ、

「 つー！」

声にならない悲鳴をあげた。

「怖くなつて飛び出して、やみくもに走つてたらキンモクセイの香  
りがしたの。ここ、よへ一緒に隠れたりしてたよね。懐かしい」

「つまり、昨日までの記憶もちゃんと持つてこるのは。さわやロブ  
のことも覚えてる?」

もちろん、トリマーがつなづく。

「それじゃ……」

コリはどこへ行った　?

ジョイのその問いをわかっているかのように、元気なままにして歩き続ける。校舎への道も迷うことはない。

「私を探してくれてたんじやないの?」

「それは、そうさ……だけど

「今度はコリを探すの?　コリなんて、ただの同級生じやない」

「ただの、っし……」

「違うの?　大事なの?　私との約束よりも?　そんなそぶりなんて見せたことないくせに」

「リリーもコリも、きみなんだろ。じつはそんな

「違うって言つてゐるでしょー!」

癪癩を起しだしたよつて叫ぶ。しかし息をつくと、ああそりね、と笑つた。

「同じところ、あつたわ。ユリはリリーが嫌いだつたでしよう。私も同じ。私も、」

# ユリが嫌い。

「やあ、本当にきみか」

「先生、私を覚えておいでですか」

「もちろんだとも。もう一度会えるとは思っていなかった」

よかつた、誰にも歓迎されないのかと思った。そう言って涙ぐむリリーの横顔に、やつしょれば自分がぶつけたのは可憐いばかりだったヒジハイは気づく。再会の喜びだとか、無事であることへの安心だとか。そういうものを忘れていた。

「リリー、きみの」両親が明日にもこちらへ到着される

両親、と聞いてリリーの目が怯えた様子を見せる。

「先生……私の両親は……お顔が、記憶の中でつながらないんですね」

「電話で母上とお話ししたよ。私からの電話に非常に驚いておられた。大丈夫、きみの」両親はたしかに王様ご夫妻だ」

「よかつた…」

「お一人がいらしたら改めて説明するがね、まずはきみに話しておかねばならない ジョイ、きみも聞きなさい」

ジョイを座らせ、微熱のあつたりリーには寝台に横にならせて、教授は“解毒剤”についての説明を始めた。

「リリー、きみがどこまで把握しているかわからないが。きみは五歳のときにある薬剤を服用した。そのせいできみの髪は黒髪になり、王様によく似ていた顔立ちも、まったく様変わりした。ここまではいいね？」

「ぐつと小むづくづく。

「あのとき薬剤を処方したのは私だ。とは言つてもあれは王家に代々伝わっていた秘薬でね。私も先代の主治医から引き継いだものを渡しただけだつた。しかしその後を見守ることができなかつたのが気がかりで、いつか、もしかしたら必要になる場合もあるかもしれないと、解毒剤を作り始めたのだよ」

解毒剤、と聞いてリリーがジョイのほうをちらりと見る。

「やべ。今はジョイとともに研究をしている。彼が加わってから研究のスピードが上がってね。試作品を作れるまでになつた。きみが昨夜誤つて口にしたもののがそれだ。そして、ここからが本題になる」

そこまで話すと、いつたんお茶で口を濡らす。すべて予測でしかないけれど、といつ前置きを挟み、話は続いた。

「何度も言つようだが、あの薬は研究途上のだ。きみにどんな作用をもたらすか、正直予測できないのだよ。もしかしたら、薬の成分が体から抜けるとともにきみはまたコリに戻るかもしれない」

「そんな……！」

「やつこつ可能性も捨てきれないということだ。だからじばりくは……やつだな、2、3日は様子を見させてほしこ」

「2、3日……」

「少し眠りなさい。微熱があるだら」

「眠るなんてできません、先生！ 眠つているあいだに自分がいな

くなつてしまつかもしれないなんて」

「リリー

「やつだ。先生、ジョイの部屋にはまだ薬が残っていました。切れそつになつたらあれをまた飲めばいいんだじょ？」

「リリー、聞きなさい。それが安全かどうかすら、まだ未確認なのだよ」

「構いません。なんなら私を使って実験していくでも」

「リリー。」

たまらず口を挟む。自分がした事の重大さを目の当たりにして、呼びかけたものの、ジョイは言うべき言葉がわからなかつた。しばし無言で見つめ合つ二人に教授が声をかける。

「やついつ可能性もある、といつだけだ。もちろんこのままの姿でい続ける可能性だつてある。まったくわからないのだよ。とにかく今日は安静にしていなさい。ジョイ、」

「はい」

「きみは部屋が隣りだと言つたね。そばについてやりなさい。  
私も今日は学内に泊まる。何かあればすぐに連絡するんだ」

一人が教授の元を辞すと、外は暗くなり始めていた。リリーの体調  
を気づかいゆつくりと歩く。

「ジニー」

「うん？」

「一人で戻るから大丈夫。授業あるんでしょ、行つたら？」

「今日はもうないよ。体、しだいだろ……？」

「ううん。平氣。別についててくれなくていい

トゲトゲしい様子に、かける言葉を選ぶことができない。

「ジニー！」

呼ばれて振り向くと、先ほどユリの部屋を覗いてくれた同級生が数人の仲間と一緒に連れ立つて歩いていた。

「ユリ見つけた？ 今の講義にも来てなかつたんだけど」

「ああ、連絡はついたよ。ちょっと調子悪いみたいだ」

「やあ。じゃあ明日も休むよつなり代返しとくわ」

そう言って手を振る友人を、リリーは足を止め、ぼんやりと見つめる。続けざまに、今度はヨウに呼び止められた。

「ジョイ、さつきの話だけ。…それから？」

リリーに会釈をしながらヨウが問う。

「ああ…幼なじみ、かな」

「へえ…どうも。ちょっと失礼。ジョイ、アルフレッド氏と連絡がついたんだけど、講演会の日では時間が十分取れないだろうからつ

てわざわざ時間を作つてくださるひでいつんだ。ただ畠山しか空いていないこりして。急だけじ構わないかな」

「俺は構わないよ

「じゃああとは云つだな。わざから連絡がつかないんだ

「ああ、せつがゆくへなこりして。部屋で寝ていたよ

「わづか……畠山出て来れるかな

「どうかな。まあ覚えておくれ

頼むわ、と口うが手を振つ去つていへ。その背中を、ココロはせつじつと見送る。

再び寮に向かって歩き出す。

「向でもない。今のは、なん?

「じつした?

「ああ、最近有名なライグヒート出身のガーデンデザイナーの人がいてね。今度大学に講演に来るっていうんで、王研で面会を申し込んだんだ フレッド・兄さんだよ」

足が止まる。

「……！ む兄さん？ 本当に…？」

「うん。ジョンソン先生が連絡を取ってくれたんだ。きみも会いたいだろ」

「もちろん… …もちろん、会いたい、」

けど。

会つていいのかわからない。意外に含んだその言葉に、寮に着くまで一人は黙つて歩いた。

「じゃあ、具合悪くなつたらすぐに呼んで。何時でも構わないから」

「…ジエー、写真を見せてくれる?」

「写真?」

「うん。あの、子どもの頃の」

「ああ…いいよ、持つて行くからきみは先に部屋に入つて休んでな」

＝＝＝＝＝

部屋に入ったリリーを待っていたのは、布団がぐらりぐらりになつたベッドと、テーブルに転がつたグラス。

慌てて飛び出しちゃつたからな…。

グラスを直し、テーブルに置いてあつた携帯電話を手に取つた。不在着信を知らせるランプが点滅している。

初めの何件かは、ジエイ。母からのメールも入つている。これからお父さんとそちらに向かつから、待つていて、と。そしてそのほかはすべて。

ユリ、今日欠席？

ユリ、連絡ちょうどだい

ユリ、大丈夫？ ノート取つておいたよ

ユリ、ユリ、ユリ、

「 つ！」

携帯電話を投げつけた。

「リリー、入るよ」

ジェイが部屋に来、その手にあつた写真をすがるように見る。 そう、大丈夫。 確かに自分は存在した。

「ずっと持つててくれたんだね。 ありがとう。……」 これ、どうしてこんなに硬い表情してるんだろう。 ああ、たしかケンカしたあとだつたかな。 ね？」

しかしへイが見ていたのは、先ほど呑みつけられた携帯電話。それを拾い、はずれた電池を直しながら問う。

「どうしたの、これ

「…みんな、ユリ、ユリって」

「だつてユリの携帯じゃな」

「もうだけど。さっきの四ウたちもユリのことばかり。ユリはたつた一日いないだけでみんなから心配されるのね」

「……」

「もうやつは私がいたはずの場所を取つていくんだわ」

…ユリはユリの部屋じゃないか。きみが着ているその服も、ユリのもの。

「ジローは私を心配してくれてたでしょ? 私を探さうとしてくれてたんだよね」

リリーの戻りを理解してやるべきなのに。たしかに会いたかったはずなのに。今はただユリの身が気遣われてならない。そのユリを否定しようとは必死のリリーに、隠れていた思いが姿を現す。

「やうだよ…会いたかったよ

「ユリじゃなくて、私、でしょ?」

「リリー、会いたかった

「ずっと私でいいんでしょ」ひ?

「会えたら、言いたいことがあった」

「なあに?」

「……」

「……なに?」

携帯電話を机に置きながら、ジョイは迷っていた。言つべきではないと、わかつっていた。けれど、ずっと抱えてきた本音だ。リリーの目を見る。

「……もひ、俺を、解放してくれ」

スッヒ、リリーの顔から表情が消えた。

そう。「リリーが嫌い」とコリに言われたときの動搖はきっと、隠していた感情を言い当てられてしまったから。

「 そうね、悪かったわ

おやすみなさい。そつとジョイを帰らせたその顔は、あのとき

キンモクセイの前で別れたときと同じ、大人向けの“姫”的なものだ  
った。

研究室のドアを開けると、見知らぬ中年の男女が座っていた。一人とも黒髪で、男性のほほは少し白髪混じり。ジョンソン教授と話していた顔を上げ、こちらを向いた。

「お父さま、お母さまー。」

隣りにいたリリーが駆け寄る。そうか、ではこの人たちが。

「やう呼ぶところ」とは、きみは今リリーなのだね。姿だけではなく心も

優しくリリーを抱き止め、声をかけると、部屋の入り口で固まっているジョイに視線を寄越した。

「ああは…」

「あの、このたびは僕の不注意で、」

「ジョイね？ ジョイでしょーー！」

女性が嬉しそうに立ち上がる。

「ヨリがよく話していたのよ。お隣の部屋の“ジョイ”的な

同じ如前だとは思つていただれど、本当にあなただったのね

なんてご縁かしさ。ナツリラヤキ田を潤ませる」の人は、ココの母親で、そして。

「あ……」

おうひれま、と呼んでよこのかわからず、ただ頭を下げるしかできない。

「やうか、きみはあのジヒイカ」

「……お久しふりです」

ともかく座りなさい。さう教授が声をかけ、一同が落ち着いたところで、ココの父 元国王が、ゆっくりと話し始めた。

「いま先生から伺つたのだがね、リリー。きみのその姿はこつまで保つかわからないそうだ」

「は」

「すぐに戻るならいい。もしもこのままだとしたら、リリー。帰つてきなさい。きみはこの国にこくてはいけない」

「お父ちゃん……！」

「もちろんきみだけではない。かつての王族は誰一人、この国にいてはいけないのだよ」

「私は、私でいてはいけないの？」

「まだ15年だ。王政を復活させようと考えている人々はまだまだいる。彼らは王族を見つけて担ぎ上げようとしているんだ。利用されてはいけない。この国を混乱させてはいけないんだ」

「せっかく戻れたのに……やつと、思い出したのに」

そう。ここに自分の居場所はないこと。この場所はコリのものだといつこと。全身で感じ取つてはいたけれど。

「リリー」

父親は優しく手を取る。

「覚えていないのも無理はないがね。きみはあるとき、私の話をきちんと理解してくれた。きみはちゃんと納得して、自分での薬を飲んだのだよ」

「私が？　自分で？」

「そうだ。あがきみの、最初で最後の王族としての仕事だった」

＝＝＝＝＝

あのとき、平和に民主化を進めるために私は姿を消すという選択をした。

王政を廃止すべきだという考えは持っていたが、それを国王が指導しては意味がない。あくまでも国民主導でなくてはいけない。同時に私たちの失踪を推進派の仕業と疑わせてもいけなかつた。だから私は逃亡という形を取つた。王妃と姫とともに そう、あれは逃亡だよ。

「逃亡」

つぶやいたジョイにひとつ頷き、王は続けた。

「国の平和のために、私たちは存在を消す必要があった。顔も、名前も変えてね。それをリリーにも説明した」

「それで、私は納得を…？」

「ああ。わかりました、と言つてくれたよ

そうだ。私は知つていた。自分の身に起きることを。リリーと

いう存在を抹消することを納得したからこそ、ジョイに写真を預けたのだった。彼にだけは覚えていてほしくて。

「小さかつたけれど、きみは立派な“姫”だったよ」

「記憶は…？自分で納得していたのなら、どうして私は覚えていなかつたの？」

「…すべて国を思つてのことだったが、きみの記憶を消したことだけは一人の親としての行動だった。きみに、何の憂いもない新しい人生を送らせてあげたかったんだ。だから催眠で記憶を消した。けれどそれは親のエゴだったかもしれないね」

「…お父さまとお母さまを責めるなんてできません…」

リリーを優しく撫でると、ジョイへと視線を向けた。

「さて、ここからは私たちだけで話をさせてくれるかね」

教授が頷き、ジョイを促して立ち上がる。

「ジョイ、わかってくれていると思うが…今日ここで私たちに会つたことは他言無用に願いたい。もちろんリリーのことも。誰にも明かさないでほしい。きみの両親にも、だ」

「はい、決して」

どこのまだ実感のわかないまま部屋を出たジニーに、教授が声をかけた。

「そろそろ時間じゃないのか？ 今田フレッシュ君が来るのだといつ。私も行くよ」

「やつでした……」

向かいかけて足を止める。

「先生……フローは、フレッシュ君さんには会わせてやれないんですね……」

「つむ。 残念だがね」

心が晴れない。

一体自分は誰を思い、誰に同情しているのか。いつもわがままを言つては自分を困らせたりリー。いなくなつたあともずっとその存在に縛られてきた。そう、コリに指摘された通りだ。そして姿を現したと思ったら今度はコリを排除しようとする。

もつ蹄めりよ。俺を解放してくれよ。昨日またひ連つたの。

「リリーがいなくなると聞くと、心が重い。一体自分は誰を思い、誰に同情しているのか。ジョイにもわからなかつた。

====

「前にこうしたことを探して出し、旦惑つていたりしようね」

「お母さん……」

小さく首を横にふる。けれど 取つておいてくれたらよかつたのに。小さい頃のことなんぞいつせし忘れてしまつのだから。あんなに温かい思い出、取つておいてほしかつた。

「あとこれからのことだがね」

「はい……」

「きみにはコリに戻つてもう。それはわかってくれるね？　しかし記憶については別だ。今度はきみが決めなさい。自分がリリーであることを、覚えておくか、消してしまつか」

「自分で……？」

うなずくと、王は大きく腕を広げた。

「その前に、顔をよく見せてくれるかい？ 久しぶりに会えた、私たちのリリーの顔を」

「お父さま…！」

「大人になつたきみに、会えるとは思つていなかつた」

父親の胸に飛び込んだリリーの髪を、母親が優しくなでる。

「ねえリリー。“ゴリ”も“リリー”も、どちらも同じ花の名よ。どちらも、お父さまとお母さまがつけた名だわ」

「…百合の花」

そうだ。両親にとつてはリリーでもゴリでも変わらない。どちらも愛する娘。

あとは私が、納得すればいいだけ。

＝＝＝＝＝

教授と二人、ヨウに指定された教室に行くとロブがいた。ヨウはフレッドを迎えて行つてゐるらしい。

「コリはやつぱり来られないって？」

「ああ…」

「ふーん。けどまあコリはそんなに興味持ってるわけでもないしな」  
たしかに。もともとコリはライグヒト王に関心なんてなかった。王研に入ったのだって、たまたま。ジョイの隣の部屋に来たのだってそうだ。なんて偶然。

そして廊下から人の声が聞こえてきた。

「いらっしゃりです。どうぞ」

「失礼 やあ、はじめまして」

三つともに部屋に入ってきた男性は、教授に会釈をし、口づに視線をやり、そして、ジョイを正面から見た。面影が、あるようなないような。大好きだった兄さん。

「改めて紹介します 教授は面識あるんですか？」

「いや、直接会つのは初めてだね」

「ええ。私は庭師の弟子に過ぎなかつたから、主治医でいらしたジョンソン先生を存じ上げてはいたが、接点はなかつたよ」

せつでしたか、と頷き、アカガハリが紹介を促した。まほはロブが名乗り、そして。

「ここにまほ。ジニーです」

「…みほ…」

差し出された手を握る。その手は優しかった。

「あと…何か王家にまつわる話を、とのことだが」

席につくと、フレッドは顔の前で手を組みゆくつと話し始めた。

「さつきも話した通り、私は王宮殿の庭師の弟子だった。弟子入りしたばかりでね。宮殿で働いていた期間は一年にも満たなかつたかな。とにかくあそこでは一番の若造、新参者だつた。だからあのとき何が起きたのかを聞きたいのだとしたら、残念ながら期待に沿えない」

「当時は何と言われたんですか」

「何も。ただ出て行きなさいと親方に言わされただけだ。親方が宮殿を退職すると言つてね。最後まで面倒をみれずにはないと。それで私は実家に戻り、留学をしたんだ」

「ですか…」

「私が今日きみたちに会いに来たのはね、リリー姫のことを話した  
いと思つたからなんだ。富殿の太陽だった姫を、忘れないでいてあ  
げてほしくてね」

リリーを、忘れないために……？

「それは願つてもないことです。リリー姫に関する公的な記録はほ  
とんどなくて」

そう答えるコウに、フレッドも頷きを返した。そして語り出す。姫  
と、同じ年の少年。富殿にいた2人の子供たちのことを。

王宮殿には当時、子どもが2人いた。ひとりはもちろん、国王夫妻の一人娘、リリー姫。そしてもうひとりは、住み込みで働いていた庭師の息子。そう、私の師匠の息子だった。

子どもたちは同じ年でね。宮殿には2人の他に子どもはいなかつたし、少年の母親もまた宮殿内で仕事をしていたから、王妃が許可をして少年も一緒に姫の養育係に世話をさせたそうだ。だから2人はいつも一緒にいた。物心つく前からね。

事情が変わったのは姫が五歳の誕生日を迎えてからだ。ライグヒト王室では、五歳を迎えたその日から帝王教育が始まる。王位継承者であるリリー姫にも、家庭教師がついた。

さすがに帝王教育に少年を同席させるわけにはいかないから、それを機に少年も父親の仕事場で田中を過ごすことになった。簡単な手伝いをさせてね。

しかし、それまで毎日一緒にいたのを急に離しても、子どもたちは納得しない。2人とも、しおちゅう抜け出しては互いを迎えに行つて、大人たちから隠れていたよ。

＝＝＝＝＝

フレッドが語る思い出話に、ジョイの中に残るかすかな記憶が甦る。

いつも一緒にいたリリー。いつも、勉強を抜け出してもジョイの手伝いをジャマしに来たリリー。

「とくに少年のせいかリリー姫を迎えていたな」

…なに？

「リリー姫は王族の一員という自覚を否が応にも持たれていたが、少年のほうは自分と姫の立場の違いを理解するにはまだ幼かったから、よく家庭教師の目を盗んでリリー姫を連れ出していたよ」

そんなどは。

「困ったのは私でね。子どもたちはいちばん年の若い私を“お兄さん”と呼んで慕ってくれた。しかし私の元に逃げ込まれると弱った」「なぜですか？」

ユウが会いの手を入れる。

「使用者は皆、誰もが子どもたちの味方だった。2人が隠してと言えば喜んで匿う。しかし、姫の家庭教師の女史に行方を尋ねられてしまらを切るなど、若造の私には難しかったんだ」

「なるほど」

「正直に行方を伝えれば、隠しておあげよと責められ、言われるがままに匿えれば、勉強のジャマをするなど叱られる。いや参ったね」

それは、自分の記憶ではなかつたのか。

「2人とも宮殿の外に出る機会はほとんどなく、大人に囲まれていた。リリー姫は自分が特別な存在であることを知っていたから、大人の前では泣き顔を見せなかつた。それでも子どもらしくいられたのは、少年がいたからだ。……少年の存在に救われていたと思うよ」

俺に？ リリーが？

「そしてそれは少年にとつても同じだった」

……！

「普通の子どものような暮らししができていなかつたのは同じだからね、彼もまた、姫と一緒にいるときだけ子どもらしくいられたんだ」

そう、だつたのだろうか。戸惑う目でフレッドを見れば、優しく頷かれる。

「ともかく子どもたちは宮殿中の人々に心から愛されていた。あの頃、皆2人の無邪気な笑顔に支えられていていたんだよ。国内の不穏な空気は宮殿内にも陰を落としていたから……子どもたちもあるいは不安定な空気を感じ取っていたかもしれないが。2人一緒にいさえすればいつも笑顔だつた」

いつも笑顔だつた…？ 一緒にいさえすれば？ 自分の中に残る記憶との違いに、戸惑いを抑えられない。そんなジェイを置いて、ジェイ以外の皆は和やかに話を続けていく。

「今日は本当にありがとうございました」

「私のほうこそ、懐かしい話ができて嬉しかったよ」

「そう言つてフレッドは一人ずつと握手をする。ジョイの手を握つたとき、

「ああ、そうだ。以前住んでいた宿舎が今は学生寮になつていると聞いたんだが。中を見ることはできるだらうか」

「それならジョイが寮住まいですよ」

フレッドと2人きりになれる口実を作つてくれた。

=====

フレッドと2人、寮までの道を歩く。会話がぽつりぽつりと生まれては途切れていぐ。

「たしか、こちうにキンモクセイの木立があつたね」

「はい。その道を折れれば」

「私が初めて剪定を任せられた木だ」

自然とそちらに足を向ける。もとより寮が見たいと言つたのもジョ

いと二人になるためだ。行き先はビビでもいい。

「！」両親はお元気だらつか

「ええ。今度会いにいらっしゃる。兄さんの活躍を知つたらきっと喜びます」

「嬉しいな。ぜひお会いしたい」

そしてまた訪れる沈黙に、キンモクセイの甘い香りが漂つ。

「せつときは納得のいかないような顔をしていたね

「……。」

「ジョイは、リリー姫のことあまり覚えていないかな

「もちろん覚えています。ただ、僕が思っていたのは少し、違つていて」

「ほ？」

「僕はいつも、勉強を抜け出して僕のジャマをしこ来るリリーを、迷惑に思つていたんです」

「……」

「いなくなつてからも、いつまでも僕の中で存在を主張する。もう

解放してほしこと、そつ思つていたんです……

だから、一緒にしゃえすればいいつも笑顔だったなんてあるはずがなくて。

「……ジョイ」

呼ぶ声に、いつのな顔を上げる。

「あのときは、さみだつてまだ小さな子供もだつた。認めていいんだよ」

「何をですか？」

「自分が傷ついたところ」とを

「……」

「大好きだつたリリーの思つ出を、そんなふつに歪めてしまつまどにね」

「そんな……」と、ほ

あるはずが。

キンモクセイから漂う甘い香りがジョイを包んだ。

この香りをかぐと、いつも彼女を思つ出す。

『ジヒー、ジヒー..』

その声が甦る。

『ジヒー待つて』

『はやくはやく、ヒヒに隠れてたい隠つからなによ』

『この場所は2人だけのひみつだもんね』

『フレッシュ兄さんにだつてないしょだよ』

『やくやく..』

約束の場所は、キンモクセイの木の陰。

『リリーが五歳になつたらもうこつしょに遊べないつて、なんで?..』

『だつてわたしお姫さまだもん。お勉強しなくひや』

『ぼくもこつしょにする..』

『ジヒーはダメだつて、お母さまが眞うんだもん』

『なんで?..』

『だつてジヒーはお姫さまじやないもん』

『なんで?..』

『わたしだってお誕生日がうれしくないのはいやだ!』

2人で写した写真は、リリーの五歳の誕生日。大人がどんなになだめすかしても、笑うことができなかつた。

『リリー、迎えにきたよ』

『ジュー!』

勉強中のリリーを迎えて行くと、いつも待ち焦がれた満面の笑みで迎えてくれた。

『ジュー、これ持つて』

リリー、泣かないで。

『わたしの顔、変えちゃうの。名前も、変えちゃうの』

リリー、行かないで。

『ジューは覚えていてね』

待つて!

手も振れなかつた。名前も呼べなかつた。イヤだよ、って言えなかつた。

リリーがいないのが、寂しくて寂しくて寂しくて。寂しいのがつらくて、蓋をしたのだ。

リリーなんていなくていいもんね。だってワガママだったし。僕が父さんの手伝いをするのをいつもジャマしてたしさ。だからいなくなつてよかつたもんね。やくそくしちゃったから顔は覚えておくけどさ。写真も取つておけばいいわ。いるないもん。リリーなんて。

やうだ。やうだつた。

呆然と立ちつくすジョイの背中を、フレッドが優しく叩く。

「兄さん」

「思い出したかい」

「僕は……」

「あのとき何があつたか、姫が今どこでどうしているか。何もわからないうが」

彼女のこと覚えていてあげたいんだ  そう言い残し、フレッドは帰つて行つた。

一人になり、ジョイは携帯電話を取り出す。リリー、今どこにいる？ 言わなければ。リリーに伝えなければ。ユリに戻つてしまつ前に。

焦りからうまくボタンを押せない。そんなジョイの耳に、求めてい

た声が聞こえてきた。

「ジョー…」

「リリー！ そこにいたのか」

キンモクセイの木陰から姿を見せたリリーに駆け寄る。

「今のお兄さんじょっ？ お顔だけでも見れてよかつた」

「話は、聞いた？」

「少し、聞こえた…」

寂しげに視線を落とすリリーの肩をつかむ。

「リリー、『ごめん。今まで』『ごめん。俺思い出したよ。リリーがいな  
いのが寂しくて、ずっとしまい込んでいたんだ』

「ジョー」

「本当は会いたかった。ずっと一緒にいたかった」

「ジョー…」

リリーの目から涙が落ちる。それを見た瞬間、ジョイはリリーを胸に抱き込んでいた。

リリーのべぐもつた声が、ジョイの胸元で響く。

「ジロー… 私、お父やおとお母やまと一緒に国へ帰るわ

肩を抱く手に力がこもる。

「それで、コリになつて戻つてくれる

「ココー…」

「お父さまと話して決めたの。旅券のいらない陸路で行くには時間がかかるから、さつそく今夜発つわ。それでね、その前に学校の中をころころ見て回つてた。リリーの田で、見ておきたくて」

体を離し、田を覗き込む。

「コリが戻つてきたら、リリーは…？」

「また消えるわ。昨日からのことも、記憶から消してもいい。国へ帰るのはそのためよ

たまらず再び抱きしめる。

「いいの。だつてこの世界はコリのものだし」

「リリー、俺… コリが好きだ。だからコリがいなくなるのは困る。けどリリーはそういうんじやなくて… もっと家族みたいに大事で…」

「悩む」とないわ、ジロー。あなたもコリを選んだのだもの

「俺が解放しようと誓つたからか？　そのことならもう」

「ううん、そうじゃなくて。最初に私を見たときユリって呼んだでしょ。全然違う格好だったのに」

「……。」

「姿が変わつても氣づいてくれるって約束、あなたはユリに果たしてたんだわ」

「たしかにあのとき、すぐにユリと氣づいた。ユリがリリーだったことにはまったく氣がつかなかつたのに。」

「いいの。私、納得してるのよ。お父さまも誓つてたでしょ？」

「この国の平和のためだもの」

「だけどリリー、やつと会えたのに。」

「それにね、ユリに嫉妬しながら生きてくよりも、嫉妬されるほうがいいじゃない？」

「何言つてんだよ……」

「わかつてゐる。他に選択肢はないつて。だから抱きしめずといはれない。」

「ジロー、私とユリね、もうひとつ共通点あつたわ。ユリは隠して

おきたがるだらうナビ、バラしちゃう

「なに…？」

ジョイの背に回したリリーの手が、ギュッとシャツを握る。

「ほんとはずっと、ジョーと一緒にいたい」

最後は涙声。

「リリー…俺今度こそ忘れないよ

「つづん、忘れて。いない誰かを想う人を見ているのは、きっとコ  
リがつらいから。今まで覚えていてくれてありがとう

見送らなくていいから、ここでさよなら。そう言って歩き出す彼女  
の背中は、15年前と変わらず凛としている。自分はまた呆然と見  
送るだけか？

いや。

「リリー…」

ふり返った彼女に、渾身の力を込めて手を振る。かける言葉は見つ  
からないけれど、せめて笑顔で。彼女が最後に見る“ジョー”的顔  
は、笑顔であつてほしい。

リリーもまた、背伸びをして大きく手を振ってくれた。ジェイが見  
たかった、あの笑顔で。

「もしもしジョイ?　おお生きてたか。」何日か顔見ないからどうしたかと思つてさ。はあ?　謹慎!?　お前何したの。……薬を?　そんなことがあつたのか。コリ実家に帰つたって聞いたけど、そのせい?　…そう、大事なかつたんだ。よかつた。へえ、実家へは親戚の用事で?　ふーん」

リリーと別れてから、ジョイは寮の自室を一步も出でていなかつた。薬剤の保管が甘かつたことを反省するよう、教授に5日間の謹慎を命じられたのだ。もとより誰にも会う気にはなれなかつたし、気持ちを落ち着かせるには部屋に閉じこもる口実は却つてありがたかつた。

ジョイの試作品の薬をコリが誤つて飲んでしまつたところまでは、隠さないことにした。コリに対してもいちばん説明がつきやすいからだ。しかし実家に戻つた理由を友人たちに説明するときは、事を荒立てないよう「親戚の用事」としておいてほしい、と、コリの両親は教授に言い残していった。

「それで?　いつ出てくんの。そう。頼むよ、毎日口づぶと2人つきりだぜ?　…うん…ああ…うん、じゃあ明日な。おやすみ」

====

翌日。ジョイはほぼ一週間ぶりにたまり場へ足を向けた。

「おー！ 生きてたか」

「殺すなよ。ミウ、昨日電話サンキュー」

ロブに苦笑を返し、ミウに挨拶をする。カバンを下ろし、座りついですると、ロブがそれを引き止めた。

「なあ、どうこれ。ミウも見てよ」

指差すパソコン画面を後ろから覗き込み、息を飲んだ。

「国王7割、王妃3割で作り直した。リリー姫ハタチの想像図」

どれ、とミウもジョイの隣りで画面を覗く。そして首をかしげた。

「これ、こないだジョイといった幼なじみって子に……」

似てるな。しかしそこまでは言えなかった。ジョイの悲痛な表情に気づいてしまったから。

「ロブ、俺…」の『真もらっていいか？』

「へえ？ もちろん構わないけど。ジョイほんとコーヒーのファンなのな。コリが妬くぜ？」うぐ

まったくロブのやつ、口も行動も余計なことをする。やつと気持ちの整理がついたところなのに。無言でベッドロックをかけてこると、ジョイの耳に懐かしい声が飛び込んできた。

「こま私のこと話してた？」

「コリ！ 助ける！」

「よお、おかえつ」

ひらひらと手を振つてロブをあしらい、コウにただいまと返すと、コリはジョイに向き合つた。

「ジョイ、なんか」めんね。私のせいだいろいろ心配…かけ、て…

ロブがはやすロキが聞こえる。コウの呆れたよつなため息が聞こえる。

ジョイはコリを抱きしめていた。

「『めん……』

「え、大げさだよお。私がいけなかつたんだし」

ね、大丈夫だから、と諭すもジョイはただ首をふるばかりで腕を離してくれない。照れを隠すように、コリは早口でまくしたてた。

「びっくりしたやつた。目覚めたら実家にいるんだもん。自分の足で帰つたらしいんだけども、2、3日記憶がないんだよね」

「なに、体は大丈夫なの？」

ジョイの肩に手を置き、そつと引き剥がしながら田代が問う。

「うん、ちょっと熱が出ただけ。親にも言われたんだ。学校戻つたらさうとジョイに謝りなさいって。…ジョイ、ちょっとやらせた…？」

「…」

「…」

「いいじゃん、痛み分け痛み分け。それよりジョイよー、お前どっちが本命なのや。こいつ」

余計なことを言つなど田代がロブの頭をはたく。しかし田ではジョイに、やつやと決めると促す。

「ユリ、本当にじめん。帰つて来てくれてよかつた…会いたかつた」

「な、どしたの、ジョイ？」

「ユリ、好きだ…もう俺から離れないでよ」

え、だつてこんな、みんないる前でそんな、

真っ赤な顔で慌てるユリに、三つとロブがニヤリと返す。

「いいじゃん、どうせ俺たち知つてんだから」

「やつやつ、俺なんかもつずつとムズムズしてたんだぜ？」

野次馬を困つたように見やる。やつやあずつとジョイが好きだったけど、突然すぎて。薬のことの罪悪感とかじゃないよね。違うよね。しかしジョイを振り向くと、そのまなざしは真剣そのもので。ユリの胸がじんわり熱くなつた。

「いいなら…隣りにいいなら、ずっとジョイと一緒にいたい」

「ずっと一緒にいたい。  
ほんとだな、リリーの言つてた通りだ。

大丈夫。一緒にいよう。ずっと。

そんな思いをこめて再び抱きしめようとしたジョイの手は、しかし  
あとは帰つてからにしろ、と戸口に止められてしまったのだった。

「そうだジョイ、会誌用の原稿を印刷に回したいんだけど」

「ああ、忘れてた。コリが監修してくれたんだっけ」

数日後、たまり場でヨウに声をかけられ、15年前の王の失踪についての原稿が書きかけだったのを思い出す。それを読んだコリに、「ジョイは王様の味方なんだね」と言われたあの原稿。

「監修つてほびじや…けど、うん、シロウトでもわかりやすかつたよ。あ、でも書きかけのときに読んだのかな、最後のとこ初めて読む」

ヨウの手にあるプリントされた原稿を覗きながら、コリが首をひねる。

「そこがすげえいいんだよ。大胆だけど面白い」

ヨウの絶贊に、今度はジョイが首をひねった。プリントを受け取り、さっと田を通して。

『この国には15年前まで王がいた。国民は王室を慕っており、若い国王夫妻と一人娘の一家は國民に愛されていた』

そう、当たり障りのないことしか書いていないはずだ。

『王の失踪には何か意図があつたのだと信じる者もいる。疲れ果てて逃げ出したのだと思っている者もいる。真実はわからないが、一滴の血も流さずに民主化を実現できたのは、王の失踪に寄与するものだと言えるのではないか』

そういう、最後に私見を加えていて

!

プリントをめくる手が止まり、目を見張る。原稿の最後は、書いた覚えのない文章。

書いたのはきっと、

……リリー。

====

この国には15年前まで王がいた。

国民は王室を慕つており、若い国王夫妻と一人娘の一家は国民に愛

されていた。

王の失踪には何か意図があつたのだと信じる者もいる。疲れ果てて逃げ出したのだと思つてゐる者もいる。眞実はわからないが、一滴の血も流さずに民主化を実現できたのは、王の失踪に寄与するものだと言えるのではないか。

いや、血が一滴も流れていなくとも、傷ついた者は多いだろう。人生を狂わされた者もいるはずだ。それでもなお、あのときの王の決断を私は誇りに思つ。

当時幼かつた姫に同情を寄せる声も聞く。しかしそれは正しくない。姫の失踪は、彼女に初めて与えられた、そして最後の、王族としての仕事だったのだから。

王位継承者として生まれ、その責務を負うことと引き換えに与えられた、恵まれた生活。ひとつも責任を果たさぬまま、ただ返上することはできない。帝王教育を始めた矢先のこと、幼いながらも彼女は自分の果たすべき役割を理解していた。

だからこの先の将来、リリー姫が姿を現すことは絶対にない。自らの存在を抹消することこそが、この国の姫として生を受けた彼女の、存在意義そのものなのだから。

＝＝＝＝＝

「最後の『し』に感謝する』ってことのま？」

「…ジヨイ?」

呼ばれてハッと我に返る。

「あ…ああ、ジョンソン教授だよ」

「なんだ俺じゃないのか」

「なんでロブ?」

「俺、ミドルネーム“ジャック”だぜ?」

「それ言つたら俺の“コウ”も中国語ではスペル「なんだけビ」

ユリが吹き出す。

「なに、全員っなの?」

ジェイもまた、笑つて返す。

「じゃあいいよ、お前ら全員ついて」と

あながち間違つてないよな、リリー。やうだらへ。

リリー。きみいつの間にこれを書いたんだ?

けど、そうだな。ただ大人しく消えて行くなんてきみらしくない。

やつぱり忘れないな。きみを忘れないよ、リリー。心配するこ  
となれ、ユリのことは大切にする。きみがヤキモチを焼くくらい  
にね。

（完）

## 終章（後書き）

じつは書き始めたのは一年近く前でした。途中で違う作品を書き始めたらそつちがすっかり楽しくなってしまい、えらい時間がかかってしまいました（楽しくなつちゃったほうの小説『サムライ・ラヴァー』もよんしければお読みください…）。

やっぱり一人称のほうが書きやすいな、というのが書き終えての感想です。

ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9775s/>

---

キンモクセイ

2011年8月12日01時15分発行